

暖地抑制トマトの栽培に関する研究
第3報 品種生態について

宮路 龍典
(鹿児島県農業試験場)

Miyaji, R.

Studies on the Vinyl House Growing of Tomato Plant
during Autumn in the Warm District

(Ⅲ) Ecological characters of the varieties

当作型は、半促成果菜と組合わせ、ハウス輪作基本体系としての普及性が認められるので、栽培の基礎資料と適品種の選定をかねて品種生態調査を行なった。

試験方法

10品種8系統を供試、播種8月12日、定植9月20日に大型ビニールハウスに行なった。栽植距離は畦幅1.8m 2条植、条間60cm、株間35cmの保温栽培とした。

試験結果

1) 草姿 概して葉数の多い品種は葉長短く、葉数少ないものは葉長が長く相互に葉面積を補っている傾向がみられる。高知ファースト、楊子は草丈低く、小振りな草姿特性をもつ。

2) 果房節位 第1果房が9~12葉位の範囲でかなり高く、花成条件の感応性に品種間差の存在することが考えられる。

3) 着蕾・開花 花芽分化が高温、長日の影響をうけ

第1表 品種の草勢に関する調査

調査日 項目	9月10日			9月20日			9月30日			10月30日			収穫時	
	草丈	葉数	葉長	草丈	葉数	葉長	草丈	葉数	葉長	草丈	葉数	葉長	1果房位	全茎丈
福壽二	cm	枚	cm	cm	枚	cm	cm	枚	cm	cm	枚	cm	cm	cm
高交配12	43	7.2	22	67	11.5	32	89	15.4	35	127	22.3	36	50	107
高知ファースト	36	5.7	20	61	9.7	29	80	13.6	35	127	19.3	36	47	118
東栄新市	35	6.6	19	62	11.0	30	85	15.1	33	122	20.9	38	44	110
三元交配世界一	36	6.6	19	60	10.7	30	77	14.8	32	109	19.8	35	49	115
大楊	36	5.9	19	61	10.2	30	83	14.9	34	127	20.6	39	50	121
F ₁ (3号×楊子)	37	5.7	19	65	9.9	31	83	13.7	34	123	18.7	39	57	136
F ₁ (6号×楊子)	35	5.9	19	60	10.0	29	77	14.0	33	115	19.7	36	49	123
	36	6.1	19	60	10.4	30	80	14.4	34	115	20.7	38	48	112
	37	6.1	20	64	10.4	32	86	14.7	35	123	19.9	39	48	111
	30	6.1	17	55	10.5	27	75	14.4	31	114	21.1	31	42	106
	20	6.9	22	63	10.9	33	81	15.3	36	111	20.4	40	46	112
	33	5.3	20	57	8.8	30	71	12.9	36	106	16.8	42	44	126

注 1) 1区25株, 2区平均値

第2表 着蕾, 開花並びに着果状況

品種	第1段果房			第2段果房			第3段果房			第4段果房			合計(平均)		為結果数	
	着蕾数	開花率	着果率	着蕾数	開花率	着果率	着蕾数	開花率	着果率	着蕾数	開花率	着果率	着蕾数	開花率		着果率
福壽二	6.8	26	78	7.6	72	63	8.0	81	87	10.5	88	66	32.9	70	73	2.2
高交配12	5.5	44	54	5.5	88	87	5.6	98	92	7.9	93	72	24.5	82	78	2.6
高知ファースト	6.9	48	21	7.5	100	75	6.8	94	87	7.6	97	80	28.8	85	69	3.8
東栄新市	5.2	39	85	6.1	89	79	7.6	90	77	7.3	96	64	26.2	81	71	3.3
三元交配世界一	7.4	66	55	8.5	92	92	8.3	85	85	6.7	94	74	30.9	84	77	3.7
大楊	5.2	58	40	4.9	94	87	4.9	94	79	6.2	99	86	21.2	86	75	3.1
F ₁ (3号×楊子)	6.4	52	58	7.4	92	92	6.0	93	86	5.9	97	81	25.7	83	77	2.6
F ₁ (6号×楊子)	5.7	63	50	8.1	84	98	7.1	90	82	7.2	90	73	28.1	83	76	1.9
	5.9	35	30	9.5	88	95	12.1	87	79	9.4	90	66	36.9	79	73	2.8
	10.8	96	80	11.8	67	85	15.3	80	96	12.4	87	76	50.3	82	88	1.1
	6.6	35	48	9.5	81	80	7.1	87	73	7.9	89	64	31.1	97	68	3.7
	6.5	56	48	7.2	94	80	7.9	95	59	8.6	82	20	30.2	83	50	6.6

注 1) 着果率は1.2段果房は4果, 3.4段果房は5果に摘果したものについて調査

第3表 開花や収穫の早晚(月, 日)と果実の特性

品種	開花始				収穫始				果形	果色	帯色と量	果実の大きさ	実き	果揃	果実の充実度	肉の裂果程度	
	1	2	3	4	1	2	3	4									
福壽二	9.22	9.27	10.1	10.9	11.22	11.22	11.28	12.2	腰高豊円	桃朱赤	緑, "	中, 少	中, 小	小	ヤヤ良	ヤヤ良	中微
高交配12	9.25	10.2	10.9	10.18	11.22	12.2	12.4	12.19	"	淡朱赤	淡緑, "	中, 少	中, 小	小	ヤヤ良	ヤヤ良	中微
高知ファースト	9.24	9.29	10.4	10.10	12.12	12.22	12.4	12.6	腰低, ヒダ	淡緑, "	中, 少	中, 小	中, 小	小	ヤヤ良	ヤヤ良	中微
東栄新市	9.27	10.2	10.11	10.19	12.2	12.4	11.28	12.20	豊円, ヒダ	淡緑, "	中, 少	中, 小	中, 小	小	ヤヤ良	ヤヤ良	中微
三元交配世界一	9.26	10.1	10.8	10.16	12.2	11.29	12.6	12.11	腰高豊円	淡桃	中, 少	中, 小	中, 小	小	ヤヤ良	ヤヤ良	中微
大楊	9.28	10.4	10.7	10.19	12.6	12.4	12.4	12.4	"	"	中, 少	中, 小	中, 小	小	ヤヤ良	ヤヤ良	中微
F ₁ (3号×楊子)	9.26	10.2	10.10	10.18	11.22	12.4	12.4	12.11	豊円	"	中, 少	中, 小	中, 小	小	ヤヤ良	ヤヤ良	中微
F ₁ (6号×楊子)	9.25	10.1	10.8	10.16	11.29	12.2	12.4	12.11	"	"	中, 少	中, 小	中, 小	小	ヤヤ良	ヤヤ良	中微
	9.25	10.2	10.9	10.17	12.4	12.2	12.4	12.6	"	"	中, 少	中, 小	中, 小	小	ヤヤ良	ヤヤ良	中微
	9.23	10.1	10.9	10.18	12.11	12.3	12.2	12.17	楕円	"	中, 少	中, 小	中, 小	小	ヤヤ良	ヤヤ良	中微
	9.29	10.1	10.16	10.24	12.4	12.4	12.13	12.25	"	"	中, 少	中, 小	中, 小	小	ヤヤ良	ヤヤ良	中微

注 1) 果実の形質は12月4日, 12月11日収穫調査の平均値

第4表 上下果別, 果房別の収量

品種	上果		下果		合計		果重標準比		1株当り上果1個		果房別果重比				
	個数	重量	個数	重量	個数	重量	上果	合計	果重	平均重	1	2	3	4	合計
福壽二	81	9.59	11	0.50	92	10.09	100	100	kg	118	%	%	%	%	%
高交配12	95	13.33	8	0.28	103	13.61	139	135	g	1.70	8	19	36	37	100
高知ファースト	82	10.75	20	0.52	102	11.27	112	112	g	1.41	6	23	38	34	100
東栄新市	91	13.73	12	0.52	103	14.25	143	141	g	1.78	4	22	29	45	100
三元交配世界一	97	14.35	8	0.29	105	14.64	149	145	g	1.83	10	28	36	24	100
大楊	81	13.65	4	0.14	85	13.79	142	137	g	1.72	12	28	33	30	100
F ₁ (3号×楊子)	94	14.12	5	0.25	99	14.37	147	142	g	1.80	8	32	35	25	100
F ₁ (6号×楊子)	95	14.12	10	0.43	105	14.55	147	144	g	1.82	10	26	34	30	100
	89	13.33	10	0.34	99	13.67	139	135	g	1.71	4	26	35	35	100
	109	14.31	11	0.54	120	14.85	149	147	g	1.86	17	23	35	25	100
	76	14.72	9	0.33	85	15.05	153	149	g	1.93	8	31	31	30	100
	70	10.58	30	0.83	100	11.41	110	113	g	1.43	12	40	33	15	100

注 1) 収量は8株当たり2区平均値

て、着蕾数の減少、開花・着果率の低下を招来し、果房では第1果房が低率で上位果房になる程多くなる。楊子は各果房を通じ抜群の多花性がみられる。

4) 着果 着果数は第1果房が少く、着果率では第1, 4果房が少くなっている。

5) 収量 早期収量では楊子が多く、福寿二号、東光の順で、総収量(重量)ではF₁(3号×楊子)が最も

多く、楊子、東光も多い。6) 適品種当作型環境で要請される品種生態から、楊子は極めて高い適応性が認められる。F₁(3号×楊子)は萎凋病抵抗性品種として育成され、大果にすぎる欠点はあるが、将来萎凋病の発生が問題となる場合には、最も注目されるべき品種となるであろう。